

岡山大学環境理工学部

環境物質工学科同窓会会報

Vol. 1

2006年6月17日

Department of Environmental Chemistry & Materials

OKAYAMA UNIVERSITY

目次 CONTENTS

	項(page)
祝辞	1
同窓会会長ならびに副会長挨拶	2
環境物質工学科における研究とその変遷	3-8
教員紹介	9-10
特別寄稿	11-12
卒業生の声	13-18
卒業生の進路	19
お知らせ	20

祝辞

環境物質工学科同窓会会誌創刊号発刊によせて

この度は同窓会誌創刊号発刊おめでとうございます。

環境理工学部が平成6年10月に発足して12年になろうとしています。

初期の卒業生等は30歳近くになり、社会のそれぞれの分野で重要な役割を担って活躍されていることと思います。

私が工学部にいた頃、やはり化学系同窓会を立ち上げ、同窓会誌創刊号を発刊しました。表紙に大学の内部を流れる座主川の写真を印刷した小冊子で、よい思い出になっています。世話人の方は大変でしょうが、頑張ってください。

いろんな体験はすべて良い経験になり、今後の人生に生きてくると思います。私はあと2年で定年退職となりますが、まだまだやりたいことは山程あり、このままでは終らないぞと静かに闘志を燃やしています。卒業生諸君は、人生これからなので、大いに頑張ってください。卒業生、学生、教職員一体となってこの環境物質工学科を盛り立てて行きましょう。

坪井 貞夫

同窓会会長ならびに副会長挨拶

同窓会会報第一号 発刊に当たり

環境物質工学科同窓会会長 渡辺 晃正

平成7年4月に岡山大学環境理工学部環境物質工学科の1期生が入学して、早いもので11年の歳月が経ちました。

平成18年3月には第8期生の卒業生の方々が学部を卒業し、環境物質工学科からは約300名の方々が社会人としてご活躍されていることと思います。また、環境物質工学科の学生の皆様も先生方の熱心なご指導のもと勉学に励んでいることと思います。

さて、今回岡山大学全体の同窓会の設立という流れから、環境物質工学科の同窓会役員の再編成が行われ総会も開催されます。

環境物質工学科同窓会は、まだまだ若い世代の方ばかりですが、1期生から学生の皆様全員が気軽に参加でき親密な関係が持てる事と確信しております。今後も、就職活動の一助や、情報交換の場等となるよう、環境物質工学科同窓会の活動を行い、この会報でもお伝えしていく予定です。

同窓会役員一同精一杯活動していきますので皆様のご指導・ご協力お願いいたします。

環境物質工学科副会長 大森 学武

この度、改めて同窓会の活動を行うことになり、副会長の任命を受けました。宜しくお願い致します。

私が環境理工学部に入學したのは1995年です。入學を希望した理由は環境問題に関心があり、環境問題改善のために何かしたいと思っていたからです。しかし、現在は環境問題改善に直接関わることはしていません。学部の時には、環境理工学概論、廃棄物工学などの授業で、環境問題に関する内容を直接的に勉強出来たと思います。

学部卒業後は博士前期と後期過程を修了し、現在は企業に就職しております。社会人になってからは、環境問題に関して自分で勉強しないといけないと思い、少しずつ本を読んでいます。また、日常生活ではゴミの分別、節電、節水等に気を付けています。

実のところ、個人的には同窓会を通して環境問題に関する情報を交換出来ればと思っています。そのため、少しで構いませんので、皆さんが同窓会に関心を持って頂けたらと思っています。

環境物質工学科における研究とその変遷

環境物質工学科は環境材料基礎化学，環境機能材料化学およびプロセス環境化学の3大講座から構成されており，それぞれの講座は2つあるいは3つの教育研究分野からなる体制で運営されてきた。その後、平成17年4月に大学院環境学研究科が発足し、全教員が大学院所属となったため、大学院教育と研究活動は環境学研究科が主体となっている。

ここでは、従来の3大講座、7教育研究分野の区分に基づいて、人員の移動状況と研究状況を述べる。

I. 環境材料基礎化学講座

(1) 環境無機化学教育研究分野

平成6年10月に教授三浦嘉也，講師難波徳郎および空席の助手ポストが工学部精密応用化学科から移行した。難波講師は移行時に助教授に昇任した。助手には移行時に丁勇工学博士（中国科学院上海光学精密機械研究所出身）が任用され教育研究に携わってきた。化学結合論・無機化学・機器分析などの講義を行うとともに平成10年3月までは工学部精密応用化学科の学生の卒業研究指導を行った。また平成12年3月までは大学院工学研究科精密応用化学専攻の学生の修士特別研究の指導を行った。丁勇助手は平成13年3月辞職し，米国でテキサスインスツルメンツの研究員を務めた後，上海で光学ガラスのベンチャー企業を立ち上げ活躍している。助手辞任後は教授と助教授二人で教育研究を行ってきたが，平成16年7月からは保健環境センター助手崎田真一が教育研究面に参加している。大学院は自然科学研究科に属していたが平成17年4月からは環境学研究科が設置され資源循環学専攻に属している。

主な研究テーマは以下の通りである。

- 1) ガラスのスペクトロスコーピーによるキャラクタリゼーションと計算化学
ガラスのLewis塩基性をXPSやNMRでキャラクタライズし，ガラスの電子状態の解明を行うとともに計算機でシミュレートし機能性ガラスの化学設計を行う。
- 2) 非線形光学ガラスの開発 表面結晶化ガラス，重金属酸化物ガラスなどについてガラスの局所構造と光学特性との相関を分光学的に研究するとともに非線形光学材料の開発を行う。
- 3) 小型光増幅装置用イオン交換光導波ガラスの開発 WDM(波長分割多重)伝送における $1.5\mu\text{m}$ 広帯域での一括増幅が可能な Er^{3+} イオンドープテルライトガラスにイオン交換法を用いて光導波路を作製するとともに光学特性評価を行い，小型光増幅用光導波ガラスの開発を行っている。

- 4) 都市ごみ焼却炉用クロムフリー耐火物の開発 都市ごみを高温熔融する炉の耐火煉瓦としてスピネル系耐火物やクロム含有量の低い $\text{Al}_2\text{O}_3\text{-Cr}_2\text{O}_3$ の開発を試みている。

(2) 環境有機化学教育研究分野

平成6年10月1日、環境理工学部の発足と同時に工学部精密応用化学科に在職していた坪井貞夫助教授が教授として着任した。坪井は、発足当初工学部、理学部の実験室を借り受け、工学部精密応用化学科の学生らと研究を開始した。後に、本学科学生に加え、各国から外国人博士研究員(4名)や留学生(5名)を受容れ、生体触媒などの環境調和型合成手法、天然物合成、廃棄フロンの有効利用、有機スズ化合物に替わる新しい船底塗料などの研究を行ってきた。平成9年6月1日、林宣之博士(平成9年3月北海道大学理学研究科後期博士課程修了)が助手として着任した。平成12年9月~13年8月の間、林助手は米国ハーバード大学に留学し、13年9月に退職した。現在農水省の研究所に勤務している。平成14年11月、逝去した横山教授のポストに高口豊助教授が信州大学より着任し、坪井と共同で研究室の運営を行うことになり、今日に至っている。高口は、太陽電池、液晶、環境浄化材料、抗癌剤などに応用可能なフラロ dendroliマー、ナノチューブに関する研究を活発に行っている。

主な研究テーマは以下の通りである。

- 1) 生体触媒などを用いる環境に優しい合成手法に関する研究
- 2) 抗腫瘍活性や抗菌活性などの生理活性を有する天然有機化合物の合成
- 3) 特定フロンの医薬品中間体への有効利用
- 4) フジツボ付着阻害物質などの新規防汚物質の合成
- 5) フラーレンを利用した可視光応答型光触媒の開発
- 6) 新規な dendroliマーの合成と医薬品への応用
- 7) リサイクルおよび省電力化を可能とする有機半導体材料の開発

(3) 環境分析化学教育研究分野

平成6年10月の学部新設にともない設置された教育研究分野であるが、実際には平成9年4月笹岡英司教授(岡山県立大学より移籍)の着任によってスタートした分野である。その後、平成13年4月に長嶺信輔氏が京都大学大学院博士課程を修了後、助手として就任、平成16年3月に大阪府立大学に転出した。平成16年10月には、オーストラリア、ニューサウスウェールズ大から、アズハ・ウディン氏が助手として就任、平成17年4月から助教授に昇任した。教育面では、環境反応工学と環境分析化学関連の講義を行い今日に至っている。研究面では、新しい環境保全技術の研究開発、持続可能な社会構築のためのエ

エネルギー環境関連技術の開発とグリーン hidrocarbon サイクルのための基礎技術の研究開発を進めている。具体的には、現在次のようなテーマ取りあげている。

環境保全技術の開発：窒素酸化物（NO_x）及び硫黄酸化物（SO_x）除去プロセス用触媒・収着剤、VOCs 除去剤、隣除去剤の開発。

エネルギー環境関連技術の開発：クリーンエネルギーテクノロジー関連技術である、水銀除去プロセス及び塩化水素除去プロセスの開発。高温脱硫プロセスの開発。

グリーン hidrocarbon サイクル関連技術の開発：GTL（Gas To Liquid）プロセスの開発。バイオマスガス化プロセスの開発。

II. 環境機能材料化学講座

(1) 高分子材料科学教育研究分野

平成6年10月本学部の開設で、工学部精密応用化学科機能材料化学講座複合材料化学教育研究分野を担当していた山下祐彦教授が同教育研究分野を継承して、本学部に所属換えとなり、当研究分野を担当し、現在に至っている。また、工学部での複合材料化学教育研究分野の教育研究に協力し、高分子ゲルの物理化学的研究を行っていた横山文義（工学部共通・基礎工学講座講師）は、平成6年10月本学部の開設と同時に助教授に昇進し、機能材料化学教育研究分野の教育研究を担当することになった。平成7年4月からは、東洋紡績(株)地球環境研究所から木村邦生博士が講師として着任し、教育研究体制の強化が図られた。工学部時代から重合過程での高分子ウイスキーの調製や導電性高分子のエピタキシャル重合法の開発を手がけた山下は、木村の参加を得て、環境物質工学科の教育研究理念に沿って「剛直高分子の高次構造制御」、「3次元精密重縮合技術の開発」、「新規耐熱高分子の合成」、「生分解性高分子の高性能化」、「環境に負荷のかからない高分子合成法の開発」等の教育研究を精力的に展開している。一方、山下は、中国鄭州大学との学術交流を積極的に推進した。また、木村はアメリカ合衆国テキサス州立大学との共同研究を実施するなど国際的にも活躍している。

平成16年に山下教授が退官され、平成15年に教授となった木村と、平成16年9月に広島大学総合科学部から講師として着任した山崎慎一博士とで講座を運営している。山崎の参加により、高分子の結晶化機構に及ぼす分子鎖絡み合いや結晶化制御に基づいた高分子材料の高性能化も研究テーマに加え、高分子化学と高分子物理とが融合した新領域での研究を開始している。

(2) 機能材料化学教育研究分野

平成6年10月に横山文義が岡山大学工学部から助教授として転任して発足し、研究室を工学部精密応用化学科別館におき、研究活動を行ってきた。平成10年4月には、研究室に初めて一期生を迎え入れることになった。平成11年4月、横山助教授は教授に昇格した。平成12年3月までは、併任のため工学研究科学生の教育研究指導をも行ってきた。

研究課題は、高分子材料学の立場に立ち、廃棄バイオマス（あるいは廃棄天然多糖類）の材料化を掲げている。具体的には、再生セルロースなど各種廃棄天然多糖類を利用した材料の開発のための基礎研究を行った。これら多糖材料は自然界の再生循環になじむ理想的なエコマテリアルである。しかし、材料製造に関わる環境負荷の問題は無視できないと考えている。このような観点から、具体的には、

- 1) 再生セルロース製造の際のプロセスの単純化と省エネ・省資源化のための基礎研究
- 2) 石油由来の材料から廃棄多糖由来の材料への転換にむけた多糖の構造化学的基礎研究
- 3) 電解質多糖類の電気化学的基礎研究

などを進めた。

横山教授は活発に研究を展開していたが、残念なことに平成13年10月に病魔に侵され他界された。

(3) エネルギー変換学教育研究分野

平成8年4月、吉尾哲夫教授が工学部から着任し、平成10年4月には長江正寛助手が着任して現在に至っている。エネルギー変換装置の高効率化によって環境保全を図りうる構造用材料の耐苛酷環境機能発現（エンジン、軽水炉、超臨界水、核融合炉壁環境適用材料）ならびに、それらの環境強度材料設計の基本的要素技術に関する教育研究を行っている。主な研究テーマは、それら先端技術開発の基盤となる各種応力、雰囲気、温度等の苛酷環境下での使用を想定したセラミックスおよび金属系の耐苛酷環境構造材料に関する下記の研究開発を実施している。

- 1) 高温構造材料の耐環境特性：低環境負荷型の装置材料に要求される耐熱・高強度で、しかも耐苛酷環境特性の発現を指向したセラミックス、Mo、W系高融点金属及びそれら複合系構造材料の研究開発。
- 2) ガラスセラミック法による電磁環境対策用Baフェライトの作製と電波吸収特性：電子通信機器の発達に伴い社会環境問題となりつつある高周波数帯域で有効な電波吸収材料の合成と物性評価。

Ⅲ. プロセス環境化学講座

(1) 物質循環工学教育研究分野

平成 8 年 4 月、三宅通博が教授として松田元秀が助教授として着任した。教育面では、無機材料の構造および物性等に関する授業を担当している。研究面では、無機材料におけるマイクロ粒子の移動現象を構造化学的に把握し、それらが関与する物性ならびに化学反応性を利用した機能性環境保全材料の開発に関する研究を以下の項目について進めている。

- 1) 環境浄化材料の開発：環境浄化に活用できる新規光触媒、新規結晶性無機多孔体、ゼオライト膜化、およびカルシウム化合物の表面改質に関する研究開発を行っている。
- 2) ソフト化学法による機能性材料の設計：空間化化合物を利用したソフト化学法により、特異的な機能を発現する新規機能性材料の設計を行っている。
- 3) クリーンエネルギー関連材料の開発：固体酸化物燃料電池、熱電変換、酸素透過用材料に関する研究開発、構造解析に基づく新規イオン伝導体の設計、およびセラミック多結晶体における粒界拡散現象と物性に関する研究を行なっている。
- 4) 廃棄物の再資源化：産業および一般廃棄物からの無機系化合物への変換プロセス開発および生成物の機能評価に関する研究を行っている。

(2) エネルギープロセス学教育研究分野

平成 6 年 10 月に環境理工学部発足と同時に設置され、北村吉朗が工学部から移籍し、教授として化学工学関係の講義とこれに関連した研究を担当してきた。また同時に松山秀人が講師として着任し、平成 10 年 4 月に助教授に昇任し、その後平成 11 年 3 月に京都工芸繊維大へ転出した（現神戸大学工学部教授）。平成 11 年 4 月に吉澤秀和が助教授として鹿児島大学から着任し、平成 16 年 4 月に教授に昇任した。平成 18 年 3 月の北村教授定年退官後は吉澤教授が研究室を担当し、平成 18 年 4 月より九州大学から小野努が助教授として着任した。また、平成 17 年 4 月からは教員の所属組織が大学院環境学研究科に移籍したのに伴い、教育研究分野名も環境プロセス工学になった。

研究面では、当初膜分離を中心にした高度分離や機能性高分子膜の形成など分離工学に関する研究を行ってきたが、現在では、「高分子コロイドおよびその分散系工学」や「機能性高分子微粒子」を中心とする材料化学工学分野や分離プロセス工学分野の研究を行っている。有機合成の手法を取り入れ、分子設計から最終的な製品へのプロセス設計に至る一貫のプロセスを自ら着手し研究を進め始めている。特に、複雑に関連する構成因子を制御し、以下に示すような機能発現のための分子設計とそれらを用いた環境調和型高分子コロイド分散

系の構築およびプロセス工学的体系化を強く推進している。

- 1) 機能重畳化高分子マイクロ&ナノカプセルの創製とその工学的応用
- 2) 機能性高分子マイクロ&ナノスフェアの界面物性制御技術と機能発現
- 3) 環境調和型ゲル調製プロセッシングの構築
- 4) 循環再生高分子の合成とその高分子コロイド分散系への展開
- 5) 環境低負荷型分離プロセスの設計

これらの研究に関連し、吉澤教授を中心に研究室所属学生や共同研究員との連携チームが、経済産業省推進の国家プロジェクト（FOCUS 21 プログラム）“カプセル活用フルカラーリライタブルペーパー”や文部科学省推進の国家プロジェクト（都市エリア産学官連携促進事業）“マイクロ反応プロセス構築のためのアクティブマイクロリアクターの開発”において中心的役割を担っている。また、これらの研究活動を通し研究室所属学生は、国内学会や国際学会において、これまでに11件の表彰を受賞した。

（環境理工学部10年史より転載）

教員紹介 (平成 11 年 4 月以降に着任分)

環境プロセス工学研究室 教授 吉澤 秀和

1999 年環境物質工学科助教授として着任し、現在、環境学研究科教授として環境プロセス工学研究室を担当しています。MIT, Media Labo.にて Postdoctoral Associate として電子ペーパーの研究に従事しました。現在、MEXT 都市エリア産学官連携促進事業研究総括, MEXT 21 世紀 COE プログラム事業推進者, 岡山地区化学工学懇話会常任幹事, 化学工学会中国四国支部幹事, 同学会材料・界面部会幹事なども務めています。

有機機能材料学研究室 助教授 高口 豊

2002 年 11 月に坪井研究室の助教授として着任しました。「物理化学 B」と「環境有機化学」の講義を担当しています。専門は有機典型元素化学および有機機能材料化学で、フラレンや dendrimer を利用した緻密な分子設計に基づく機能性分子を有機合成化学を駆使して合成し、その機能と有用性を明らかとする研究を行っています。企業との共同研究には前向きで、特に、卒業生の皆さんとのプロジェクトを熱望しています。

環境反応工学研究室

助教授 Md. Azhar Uddin (モハマッド・アズハ・ウッディン)

私は 1961 年、バングラデシュに生まれ、バングラデシュ工科大学 (化学工学専攻) を卒業、1988 年 4 月に国費留学生として来日しました。広島大学教育学部で日本語研修を受けた後、岡山大学工学部博士前期課程 (合成化学専攻 1991 年 3 月終了)、東京工業大学大学院理工学研究科博士後期課程 (化学専攻 1994 年 3 月学位取得) を終了しました。1994 年 4 月に岡山大学工学部助手として着任しました。2002 年 1 月にオーストラリア (ニューカッスル大学化学工学科上級研究員) に移りました。2004 年 10 月に岡山大学環境理工学助手に着任しました。2005 年 4 月に岡山大学大学院環境学研究科助教授になり、「反応工学」、「外国書購読」と「エネルギー資源循環工学」(大学院) を担当しています。主な研究テーマは“FT (フィッシャー・トロプシュ) 合成用鉄系触媒の開発”、“木

質バイオマスの水蒸気接触ガス化とバイオマスチャーの CO₂ ガス化プロセスの開発”、及び “排ガス浄化用多孔質固体の開発” です。

環境プロセス工学研究室 助教授 小野 努

2006年4月から環境物質工学科の助教授として、吉澤教授とともに環境調和型微粒子やコロイドを利用した独創的研究を目指しています。北九州出身で学生時代から助手までは九州大学で過ごしていましたので、九州を出るのはアメリカ留学時以外では初めてになります。まだ現役の草サッカー選手でもあり、体力とフットワークを活かして今後の学部の発展に貢献していきたいと思っていますのでよろしくをお願いします。

環境高分子材料学研究室 講師 山崎 慎一

2004年9月から環境高分子材料学研究室で教育・研究に従事している山崎慎一です。9年間、名古屋で学生生活を送り、その後5年間広島大学でポスドク研究員として勤務したのち、岡山大学に着任しました。これまでに高分子の結晶化や溶液物性に関する研究を行ってきました。これからは、エコ材料としての高分子という側面も意識して、サイエンスとしての面白さ・意義を忘れることなく教育・研究に取り組みたいと思います。

岡山大学保健環境センター環境安全部門 助手 崎田 真一

平成16年7月から助手として働いています。所属先は保健環境センター環境安全部門 になりますので、排水・廃液・環境・安全管理に関する業務をこなしながら、環境理工学部環境物質工 学科で研究・教育をさせていただいています。三浦研究室（セラミックス材料学（旧環境無機化学）講座）で主にガラスと環境に関する研究を行っており、教育として環境分析化学実験、環境化学実験、教養基礎物理学実験を担当しています。

特別寄稿

山下先生（2004.3月退官）ならびに北村先生（2006.3月退官）より、退官後の近況や環境物質工学科発足時の思い出について原稿を寄せていただきました。

「定年退官その後」

岡山大学名誉教授 山下 祐彦

国立大学が法人化する直前の平成16年3月に、私は42年間勤めた岡山大学を奇しくも無事定年退官することができました。最後の10年間は環境物質工学科の創設と進展に微力ながら関わらせて頂きました。ともすればマンネリ化しやすい最後を、新しい場所で緊張感をもって勤めさせて頂いたこと、並びに新しい学問分野環境理工学に果敢に挑戦された多くの学生さん達との出会いがあったことを心から感謝しております。

その後2年が過ぎましたが、家内との小旅行を楽しんだり、四国88カ所霊場巡りを通して修行のまねごとをしたり、だんだん下手になるゴルフや毎日1時間程のウォーキングに汗を流したりしています。一方では、ちょうど2年ほど前から病気で入退院を繰り返ははじめ、それにとまって発症したと思われる認知症老母の世話などに明け暮れています。認知症は話には聞いていましたが、身近にそれを経験するとその奥深い無惨さが理解できます。これは現代文明の陰の部分を示しているとも考えられますが、社会的に多くの人々に大変な迷惑をかけていることも確かです。親の遺伝子を受け継いでいる自分にも何時やってくるかも知れません。常に前向きに生きていくことが予防に大切と心に誓い、気力を充実させ、退官後の余生を静かに過ごしている今日この頃です。

最後になりましたが、皆様方のご活躍と環境物質工学科の同窓会の益々のご発展を祈念しています。

「環境理工学部スタートの頃」

岡山大学名誉教授 北村 吉朗

この3月で岡山大学での40年間の教員生活に終止符を打った。大半を過ごした工学部での記憶より、最後の10年を過ごした環境理工学部での出来事の方が印象深いのは、記憶が新しいだけでなくより濃密だったためであろう。40年間接した学生は多いが、強く印象に残るのは助手になった頃の学生と、環境理工学部発足時の学生達である。後者の印象は、工学部1期生として入学した頃の状況にオーバーラップさせた私自身のメンタルな効果も含まれるのであろうか。

環境理工学部への移行を決めたのは何時頃であったか、既に記憶が薄れているが新しいカリキュラムの決定時期からそう離れていない時期であった。あわただしく関連の専門科目の名称などを検討したことを憶えている。少し前の大学設置基準の改正により長らく続いてきた教養課程が大きく変わろうとしていることは知っていたが、この改訂が当初の期待やおおかたの予測とはかなり異なることに気付いたのは新学部が発足してからであった。

第1期生が入学し教務委員として履修ガイダンスをする立場になると、他学部に比べ教養課程の選択肢が極端に狭いことの説明に苦労したことを思い出す。この点の解消は99年の教養課程のカリキュラム改組まで持ち越された。この改組のための授業アンケートの委員となり、報告書を委員長としてまとめるはめになってしまった。理系の基礎科目として重要な科目が最も不人気であったことや、全学の1・2年生の2000以上の自由記述意見を読み、予想以上にまじめな意見が多かったことを憶えている。理系の学生にとって重要な基礎科目である共通科目と、いわゆる教養科目を同じ土俵で比較し論じることの無意味さをつくづく感じたのもこの頃である。

開学以来はじめて実施されたこのアンケートは専門科目も含め全学部に拡大・継続中であるが、毎年大量の質問を繰り返し、マンネリ化・形骸化しつつあるように感じる。長年改革に背を向けたまま幕を閉じたかつての教養教育課程の轍を踏むことは避けたいものだ、などと思いながら私自身が舞台から降りる時期を迎えた。

卒業生の声

「環境物質工学科同窓会発足に寄せて」

第1期生 小橋 和文 (山下研)

私は山下祐彦先生の研究室で大学院博士課程を2004年に修了しました。環境物質工学科同窓会発足に寄せて、近況をご報告いたします。現在は、米国テキサス州ヒューストンのライス大学で博士研究員をしております。ライス大学ではナノテクノロジーを代表するカーボンナノチューブに関する研究が活発に行われており、国際色豊かな研究者が集い研究室間でも共同研究が盛んです。私は James M. Tour 先生の研究室で単層カーボンナノチューブと芳香族高分子の複合材料に関する研究を行っています。渡米して一年半程経ち、こちらでの生活にも慣れてはきましたが、文化や考え方の違い等、毎日新しい発見があります。ヒューストンはもう夏が近づいてきました。ここライス大学から、良い研究成果を発信していければと思います。

第1期生 厚見 貴志 (吉尾研)

平成13年に修士課程を卒業し、社会人になって丸5年が過ぎました。今では多くの責任ある仕事を任せられ、多忙ながらも充実した日々を過ごしています。しかし、今でも時折悩まされるのが「成果を出す」ということです。その度に研究室時代の思い出がよみがえってきます。

私は学部・院の3年間を通して、まともな研究成果を出した試しがありませんでした。特に研究室へ配属された頃のそれは、今思い返しても目を覆いたくなるほどひどいものでした。普通なら見放されてもおかしくないようなところを、多くの方に根気よく指導していただき、そのおかげでまがいなりにも修士課程まで修了することができました。指導教授の吉尾先生には、そのままでは社会で通用しそうになかった出来損ないの私を、卒業・就職できるまで鍛えていただきました。また、研究に行き詰まった時、長江先生にはお酒を飲みながら深夜まで相談に乗っていただき、諦めの早い私も「もう少し頑張ってみよう」という気持ちを持つ事ができました。

今でも行き詰まった時は、あの頃の先生方とのやりとりを思い出し、前向きに取り組むようにしています。

第1期生 清家 崇広 (三宅研)

環境物質工学科同窓会・第一回総会の開催にあたり、心よりお祝い申し上げます。私は2004年に大学院卒業後、現在、大阪の化学メーカーで博士研究員として勤務しております。もともと不精者ですので、研究室を訪ねたり、友人ともほとんど連絡をとっていないのですが、幸い同じ所内に後輩の長尾君と佐藤さん（木村研）がいますので、よく環境物質の話題を耳にします。先生方や同輩、後輩の皆さんの話を聞くと、懐かしいのと同時に妙にやる気が湧いてきて、無意味に階段を駆け上がったりしています。その度に体力の衰えを感じ、健康の大事さを痛感している今日この頃です。皆様のご健康と益々のご発展をお祈りいたします。

第1期生 原田 秀忠 (横山研)

この度は『環境物質工学科同窓会』第一回総会の開催にあたり、心よりお祝い申し上げます。また、関係者の皆様のご尽力に感謝いたします。

卒業後、すっかり大学から足が遠のいていましたので、今回の話を頂き、何を書いたら良いのやら…。悩んでいる内に締め切りを過ぎてしまいました。

今回は横山研代表としてご指名頂きましたので、横山先生を偲んでみたいと思います。

先生はとにかく文章に厳しい方でした。テストの答案然り、報告書然り。論文に至っては修正するのに一晩かかるほど添削して頂きました。当時はきつい思いをしましたが、今考えると、文章をしっかりと書くことで思考プロセスをはっきりさせようとして頂いたのでしょうか。

卒業する際に先生から頂いた言葉「社会人はプレッシャーとの戦い、だから頑張れ」は、日々心の支えになっています。横山先生、ありがとうございました。

最後になりましたが本会が今後ますます発展することを祈念しております。

第2期生 西地 愛 (山下研)

大学時代は山下研（現木村研）に所属し、新規フッ素含有ポリマーに関する研究を行っていました。修士課程修了後、2002年に日本触媒に就職し、現在も研究員として働いています。

就職活動の際、大学研究を活かせる仕事をしたかったので共同研究等で関わりの深いこの会社を選びました。希望どおり高分子材料の開発を行う部署で研究することになりました。思いついたアイデアを実際に実験してみたり、興味あるテーマを提案したりできるのでやりがいがあります。ただし急に他部署の手伝いに出される時も、汗だくになるまで肉体労働しなくてはならない時もあります。

研究職についての利点の一つは、高分子学会や仕事で先生や大学の同期に会えることです。みんなの近況報告を聞くと、自分ももっとがんばろうと思えることができます。

第2期生 西野 悟 (北村研)

私は物質工学科の2期生として、平成12年に物質工学科を卒業しました。その後、平成17年に岡山大学大学院博士後期課程を修了し、現在は、奈良工業高等専門学校 物質化学工学科に勤務しています。入学当初は学部棟もまだ建っておらず、様々な場所で講義を受けていたことが懐かしく思い出されます。現在、私は教育・研究に携わる仕事をしています。学生に講義や実験を教えるときには自分の学部時代を思い出し、物質工学科の先生方がどのように指導されていたかと思い出しながら、学生と接しています。高専生は年齢層が広く、さまざまな学生の指導と研究室の立ち上げに悪戦苦闘している毎日ですが、先生方をはじめとして、先輩、後輩方に教わったことが活かされているのを実感しています。最後になりましたが、物質工学科同窓会が今後もますます発展していくことを心より願っています。

第2期生 本田 晶子 (笹岡研)

現在私の勤めている財団法人岡山県環境保全事業団は、地域社会の環境保全に貢献するために、環境教育や廃棄物処理、環境調査、緑化等、各種事業を幅広く実施しています。昨年度までの2年間、私は岡山県内の廃棄物を処分する最終処分場の残存容量が減少していることから、新たな最終処分場の建設に向けて準備を進める業務に従事していました。この4月からは、廃棄物の有効利用や減量化を考慮した焼却施設の現場で運転管理を行っています。

第4期生 梅本 光 (坪井研)

私は現在大塚化学(株)で研究職についています。岡山大学を修士で卒業して、今年から三年目の勤務になります。会社では大学の時と同様、有機合成の研究をしています。同じ有機合成ですが、大学の時と異なることが2つあります。1つは研究のスタイルで、とにかく効率優先です。いろんな所と共同研究を行い、いいところ取りでテーマを仕上げていく感じです。大学でのように、考えに考えて答えを見つけ出すようなことは少なくなったかもしれません。少し寂しいですが、逆に自分の研究の世界がだいぶ広がりました。もう1つは作業的なことですが、とにかくスケールが大きくなったことです。大学では~mgスケールだったのが、今は~kgで反応を仕込むこともあります。当然反応器も20Lだったり1000Lだったりします。結構体力仕事になることも・・・。

岡山大学で、特に研究室で学んだことは今とても役に立っています。あとはもう少し、柔道とかして体力をつけておけばよかったかな。以上。

「酒と研究と私」

第4期生 札幌 誠司 (三浦研)

私はお酒が大好きです。大学時代の私は毎日毎日、沢山沢山お酒を飲んでいました。そんな私が研究室に配属されました。平成13年、4回生の春です。

研究室所属後も私はお酒を飲み続けました。私の所属していた研究室の面々は気さくな人ばかりであった上に漏れ無くお酒好きであったため、私のグラスは乾く暇がありません。そんな夏に大学院入試が行われました。

私も大学院進学を希望し、試験を受けました。「何とかなるかも」という甘い考えを持っていた私は当然ながら入試に落ちました。そんな中で、先生から「生活態度をあらためますね！」という叱責の言葉をいただきました。その言葉は自分自身を見つめ直すきっかけとなり、研究や研究装置の技術取得を行う傍ら勉強をやり直すことで、後期試験で無事に合格することができました。

大学院進学後は研究装置の管理を任されました。大学院で研究を続けることで一つの物事を様々な角度から見ようとする姿勢を、研究装置の管理から責任感を養うことができました。研究室で培われたこれらのことは社会人となった今でも大切にしています。そして先生から頂いた叱責の言葉も自分自身への戒めとして大切に胸に刻んでいます。(環境理工学部10年史 寄稿より転載)

第5期生 金谷 浩子 (北村研)

早いもので、岡山大学を卒業して1年が経ちました。大学時代は朝9時近くに起きていた私も、去年一年で6時に起床できるようになり、会社員としての生活習慣が身についたことに驚いています。入社当時は、早くこの環境に慣れないとという焦りもあり、また新しく覚えられないことばかりで大変でしたが、一年経ってようやく生活が落ち着いてきました。職場内にはこの道何十年という方が多く、色々と刺激を受けることが多いです。化学メーカーなので、これまでの知識が活かせるかと思っていましたが、入ってみると新しく勉強しないとイケないことばかりでした。反面、もっと学生時代にあの科目を勉強しておけばと反省することもありました。仕事の仕方に関しては、大学の研究室で学んだことが役に立っていると感じます。去年一年はとにかく目の前にある仕事を行うことで精一杯でしたが、今年はもう少し落ち着いて仕事に取り組んでいきたいと思えます。

第7期生 河邊 舞 (吉尾研)

私の大学生活4年間で一番笑った回数が多いのは、研究室に配属されてからの1年間だと思います。

私の所属していた研究室は、楽しい人が多く、いつも笑いの耐えない研究室でした。毎週木曜日のゼミ終了後に、皆で何かのイベントをするのが恒例で、鍋パーティ、真夜中の鳥取砂丘、肝試しなど、たくさん笑った思い出があります。

そんな毎日の積み重ねで、私たちはひとつの研究室という1つのコミュニティに属する、「仲間」になることができました。最後の卒業研究を終えたときの感情は、自分自身の達成感というより、研究室の仲間みんなで1つのことをやり遂げたという感情に近かったような気がします。

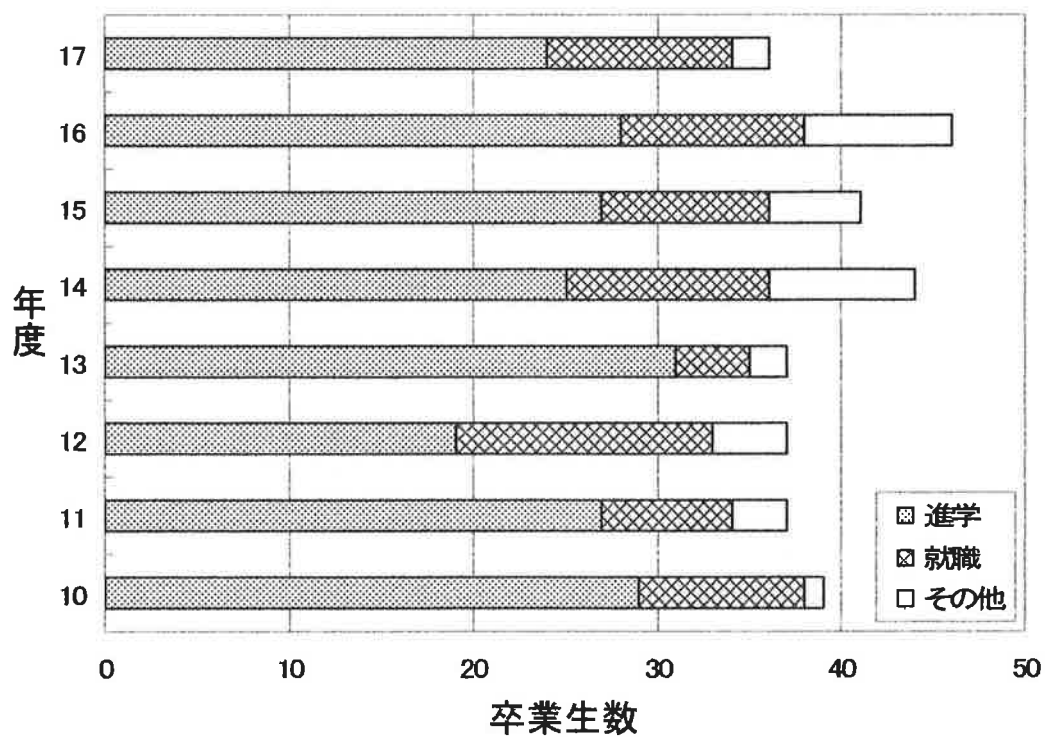
さて、私は今、社会人2年生を迎えました。このような大学生活の楽しい思い出は、不思議と「あのころに戻りたい」というだけではなく、「これからも楽しいことがいっぱいあるはず」という、前向きな気持ちにさせてくれます。今後も、大学生活の楽しい思い出を大切に、さらに楽しい思い出を作っていきたいと思います。

第7期生 槇野 美妃 (北村研)

平成16年度学部卒業の槇野と申します。エネルギープロセス学研究室の学部生として1年間、多くのことを学ばせて頂き、現在は岡山研内の企業に就職、社会人生活2年目を迎えて居ます。社会に出て働くようになり、学生時代には当然のことのように思っていたことが、実はとても恵まれていた、また、甘やかされていたのだと気づくことが多くあります。まだまだ半人前ですが、今後もいい意味で学生気分を忘れず、常に学ぶ姿勢で頑張っていきたいと思っています。

卒業生の進路

年度	進学者		就職者		その他	合計
	岡山大学大学院	その他	企業	官公庁		
10	27	2	9	0	1	39
11	21	6	7	0	3	37
12	18	1	13	1	4	37
13	26	5	3	1	2	37
14	23	2	9	2	8	44
15	26	1	8	1	5	41
16	25	3	8	2	8	46
17	24	0	10	0	2	36
合計	190	20	67	7	33	317



お知らせ

環境物質工学科同窓会の HP (URL : <http://150.46.228.3/Alumni/>) が開設しました。環境物質工学科の HP からアクセス可能で同窓会の会則や情報交換用の掲示板もありますので、どうぞご利用ください。



岡山大学